



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

修養^{しゅうよう}して人間^{にんげん}を磨^{みが}きましよう

本年^{ほんねん}は36年^{ねん}に一度^どの「五黄^{おう}の寅^{とら}」という年^{とし}です。九星^{せいせい}気^き学^{がく}と十二支^しの組^くみ合^あわせの中^{なか}でも最^もも運^{うん}気^きが強い年^{とし}とされてい^ます。また十干^{かん}十二支^しでは「壬寅^{みずのえとら}」という年^{とし}です。こ^れは、陽^{よう}気^きを孕^{はら}み、春^{はる}の胎^{たい}動^{どう}を助^{たす}ける、という意^い味^みで、冬^{ふゆ}が厳^{きび}しい程^{ほど}春^{はる}の芽^め吹^ぶきは生^{せい}命^{めい}力^{りき}にあふ^れ、華^は々^なしく生^うまれ出^でる年^{とし}にな^るとい^うこ^とです。

世^せ界^{かい}の人^{ひと}々^{びと}が長^{なが}く苦^{くる}しんだコ^こロ^ろナが終^{しゆう}息^{そく}し、新^{あら}たな時^じ代^{だい}が力^{ちから}強^{つよ}く始^{はじ}まるこ^とを象^{しょう}徴^{ちゆう}してい^るよ^うに感^{かん}じま^すす。

今^{ことし}年^{ねん}は例^{れい}年^{ねん}にも増^まして、誓^{ちか}いを新^{あら}たにし^て、徳^{とく}を重^{かさ}ね^てい^かね^ばと思^{おも}いま^す。



マザーテレサの言葉です。

「思考に気をつけなさい。それはいつか言葉になるから。
言葉に気をつけなさい。それはいつか行動になるから。
行動に気をつけなさい。それはいつか習慣になるから。
習慣に気をつけなさい。それはいつか性格になるから。
性格に気をつけなさい。それはいつか運命になるから」

昔、芥川龍之介が「人の運命はその人の性格の中にある」
と言いましたが、延いては思考、思いの中にあるということ
とです。

年の初めにどういう思いを持つか、どういう思いでその
年を始めるかが、その年の運命を左右する大事な要素だと思
います。

また、お誓いや思いを持って一年を始めるのですが、そ



の思おもいを継けい続ぞくさせることが殊ことに大だい事じです。これを精しょう進じんとか修しゅう養ようといいまます。日に達たつ上しやう人にんが「トイレを使つかつて出でる時ときに履はき物ものを揃そろえる。これを続つづけるだけでも大おおきな徳とくになる」とよくおっしやつていまました。

女優じやゆうの三林京子みつばやしきやうこさんのお話はなしです。

三林みつばやしさんは大おお阪さか芸げい術じゆつ大たい学がくの短たん期き大だい学がく部ぶで演えん劇げきの身しん体たい表ひょう現げんを教おしえていまました。その時ときに、ままず姿し勢せいと挨あい拶さつを徹てつ底てい的てきに教おしえたといいまます。特とくに挨あい拶さつです。「先せん生せい、どどうしてそそんなに挨あい拶さつが大だい事じなんですか」と尋たずねる生せい徒とに、三林みつばしさんは「何なにを言いつていいるの。人にん間げんととしての基き本ほん中ちゆうの基き本ほんですよ。これこれががきちんちんとでできたら、ああとは自し然ぜんにでできるものよ」と言いわわれたそそううです。

その学がく校こうでは毎まい年とし、新しん入にゅう生せいがが入はいつてくくると上じやう級きゆう生せいが「学がく



長^{ちやう}、「学部^{がくぶ}長^{ちやう}」、「学食^{がくしよく}のおばちゃん」、「掃除^{そうじ}のおじさん」というような名札^{なふだ}をつけて校庭^{こうてい}に立^たっています。あらかじめ新入生^{しんにゅうせい}には「門^{もん}をくぐってから名札^{なふだ}をつけている人^{ひと}を見つけたら、全員^{ぜんいん}に挨拶^{あいさつ}をしてから校舎^{こうしゃ}に入りなさい」と伝^{つた}えておきます。新入生^{しんにゅうせい}達^{たち}は名札^{なふだ}を見て、学長^{がくちやう}だと「おはようございます」と丁寧^{ていねい}に挨拶^{あいさつ}し、掃除^{そうじ}のおじさんだと「おはよう」と通り過^{とほ}ぎていくそうです。それを見て、三^{みつ}林^{ばやし}さんは叱^{しか}りました。

「どうしてあなたは役職^{やくしやく}によって挨拶^{あいさつ}を変えるんですか？」叱^{しか}られた女子学生^{じょしがくせい}はワンワン泣^ないたそうです。そこから学生^{がくせい}達の態度^{たいど}が変わり始^{はじ}めるのだそうです。

三^{みつ}林^{ばやし}さんは言^いわれます。

「卒業^{そつぎやう}して多くの学生^{がくせい}がオーディション^{おーでいしょん}を受^うけます。その時^{とき}に挨拶^{あいさつ}をしただけで、『合格^{ごうかく}』と言^いわれた学生^{がくせい}が何人^{なんにん}も



いました」

一つのことを、しっかり続け（つづ）ていくだけでこのように（にん）人
間（げん）がかわっていくということです。

ほうおんに ぐかいさんしょうにん じだい にちれんしやう
法音寺は御開山上人の時代に日蓮宗のお寺になりました
が、それまでは在家教団（ざいけきやうだん）でした。最初は「仏教感化救済会（ぶつきやうかんかきゆうさいかい）」
という名前（なまえ）でした。昭和（しやうわ）の初期（しよき）からは「仏教修養団（ぶつきやうしやうだん）」、以（い）
降（こ）「佛教樹徳修養団（ぶつぎやうじゆとくしやうだん）」、「大乘修養団（だいじやうしやうだん）」と、一貫（いっかん）して「修
養団（しやうだん）」と名乗（な）ってきました。これは先師（せんし）が、いつの時代（じだい）に
も修養（しやうやう）が大事（だいじ）である（だ）という（い）ことに主眼（しゅがん）を置（お）いてこられた
証（しやう）拠（こ）だと思（おも）います。

さつこん
昨今（さつこん）はあまり修養（しやうやう）という（い）言葉（ことば）を使（つか）わなくなりました。
修養（しやうやう）なんて堅苦（かたく）しい（い）という（い）思（おも）いが現代人（げんだいじん）にはある（あ）のか
もしれません。先師（せんし）の時代（じだい）、日本（にほん）は修養（しやうやう）の時代（じだい）でした。



かつて講談社に『修養全集』（全十二巻）というものがありました。第一巻の最初に東郷平八郎元帥の「誠」という揮毫があり、次にお釈迦さまとキリストと孔子が鼎談をしている絵があります。この全集はとても高価でしたが、売れに売れました。今の講談社の礎がこれによって築かれたというくらいに売れたそうです。それくらい昔の人は修養を重んじていたということです。

同じ頃、新渡戸稲造博士の『修養』という本も明治44年9月3日に初版が出て、二カ月後に十一版が出ています。修養の本が二カ月間で十一回も版を重ねたのです。まさに修養の時代です。

私がこの本を知ったきっかけは上智大学の名誉教授だった渡部昇一先生が講演で、自分の恩書として紹介されたことです。読んでみて非常に感銘を受けました。



新渡戸稲造博士は母子家庭でした。お母さんがとても教育熱心な人でした。小学校の高学年ぐらいから国内留学をさせました。子どもですからお母さんのもとを離れたくありません。だから留学先で「帰りたい」という手紙を書きました。その都度、お母さんが「もう少し頑張るなさい。ちゃんと学問を修めてから帰ってきなさい」という手紙のやり取りが何度もありました。

その後、札幌農学校（現・北海道大学）に入って、一年生の時に最優秀の成績を取りました。直ぐに「最優秀の成績を修めることができました。母上にその成績を見せに帰りたいと思います」と手紙を書いて盛岡の家に帰ると、お母さんは三日前に亡くなっていました。もう悲しくて悲しくて、ノイローゼになってしまいました。頑張って頑張っ

てついにお母さんに会えると喜び勇んで帰ったら、お母さ



んが亡^なくなっていたのです。ノイローゼにもなります。

たまたまその時^{とき}、札幌^{さっぽろ}農学校の図書室^{としょしつ}にあったアメリカの雑誌^{ざっし}にトーマス・カーライルという人^{ひと}のことが書いてありました。その記事^{きじ}を読んで、〃この人は自分の悩み^{なや}をわかつている。この人^{ひと}の本^{ほん}をぜひ読^よみたい〃と思いました。ところが札幌^{さっぽろ}農学校^{のうがっこう}にはカーライルの本^{ほん}がありませんでした。上京^{じやうきやう}までして探^{さが}しましたが、どこにもありません。あきらめかけた時^{とき}に、洗礼^{せんれい}を授^{さず}けてくれたハリス牧師^{ぼくし}がアメリカに帰^{かえ}ることになり「自分の蔵書^{ぞうしょ}を置^おいていくので、欲^ほしいものがあつたら自由^{じゆう}に持^もって行きなさい」と言^いわれました。その中^{なか}にカーライルの『衣装哲学^{いしやうてつがく}』(原題^{げんだい} サータ・リサータス)という本^{ほん}がありました。博士^{はくし}はこの本^{ほん}をもらって読^よみました。生涯^{しやうがい}に三十回以上繰^かり返^{かえ}し読^よんだといひます。非常^{ひじょう}に難^{むずか}しい本^{ほん}ですが、〃人の外見^{がいけん}を全部^{ぜんぶ}はぎ



取^とって考^{かん}えたらどうなるか。それは結局^{けつぎよく}魂^{たましい}である。魂^{たましい}しか残^{のこ}らない。この魂^{たましい}を磨^{みが}くことが大事^{だいじ}だ^{おも}と思^{おも}われ、『武士^{ぶし}道^{どう}』や『修養^{しゅうよう}』を書^かかれたと思^{おも}うのです。

『代表的^{だいひょうてき}日本人^{にほんじん}』を書^かいた友人^{ゆうじん}の宣教師^{せんきょうし}・内村鑑三^{うちむらかんぞう}も同じハリス牧師^{ぼくし}に洗礼^{せんれい}を受^うけています。内村鑑三^{うちむらかんぞう}もカーライルが大好き^{だいす}でした。内村鑑三^{うちむらかんぞう}は自^{みづか}らの著書^{ちよしょ}である『後世^{こうせい}への最大^{さいだい}遺物^{いぶつ}』の中^{なか}で「カーライルの伝記^{でんき}を読^よむと、カーライルの一生^{いっしやう}に比^{くら}べれば、カーライルの書^かいた40冊^{さつぽど}程^{ちよさく}の著作^{ちよさく}は価値^{かち}が小^{ちひ}さいように思^{おも}える」と言^いっています。

続^{つづ}けて内村鑑三^{うちむらかんぞう}は「カーライルの一番^{ばん}有名^{ゆうめい}な本^{ほん}は『フランス革命^{かくめい}史^し』である。歴史^{れきし}家^かも、イギリス人^{いんじん}が書^かいた歴史^{れきし}書^{しよ}では、この本^{ほん}が最^ももすぐれてい^いるものの一^{いっ}つだろ^うと言^いっている。読^よめば誰^{だれ}もがそ^おう思^{おも}うだろ^う。フランス革命^{かくめい}をまるで目^めの前^{まえ}で起^おこっていることのように、映^{えい}像^{ぞう}が流^{なが}れる



ように、いきいきと活写かつしゃしている。どんなにすぐれた画家がでも、そんな風ふうには描えがけないと思おもう。こんな本ほんが読よめて幸せだと思おもうくらい価値かちのある本ほんである。けれども、カーライルがこの本ほんを完成かんせいさせるまでの苦勞くろうを書かいた伝記でんきを読よむと、カーライルの一生いっしょうはこの本ほんよりも、さらにすばらしいと思おもえるのである」と言いっています。

カーライルはこの本ほんを書かくのに一生いっしょうを掛かけたといっています。本ほん自体はそんなに長ながいものではないのですが、この本ほんを書かくためにあらゆる資料しりょうを集めて研究けんきゅうし、情熱じょうねつと勞力ろうりきを傾かへけて、何十年なんねんもかけて構想こうそうを練ねり、書き上げた本ほんでした。カーライルが清書せいしょし終わった時に友人ゆうじんが遊びあそびに来きました。その友人ゆうじんが「読よませてほしい」と言いうので、「ちようど良かった。意見いけんを聞きかせてくれないか」と渡わたすと、友人ゆうじんは一晩ばんかけて読よんで非常に感銘かんめいを受うけ、別べつの友人ゆうじんに又貸またがしをしま



した。別の友人は読んで机の上に置いて寝てしまいました。
そのあとに家政婦さんが来て、ストーブに火をつけるのに
丁度良い紙があると思い、その原稿を燃やしてしまいました
た。何十年もかけた労作が数分で灰になってしまいました。
その後、又貸しをされた友人はびっくりして、借りた友人
に「家政婦が燃やしてしまった。どうしよう」と言うので
すが、「お金だったら同じ金額を返せばいい。家だったら
建て直してあげればいい。原稿はどうしようもない。死ん
でわびてもダメだ。とにかく正直に言うしかない」という
ことで、二人はカーライルのところに行って起こったこと
を正直に話して謝罪しました。それを聞いたカーライルは
少しの間放心状態になりますが、すぐに気を取り直して、
自分に「お前は愚かな人間だ。お前の書いたフランス革命
史はそんなに立派な本ではない。一番大事なのはお前がこ



の不幸に耐えて、もう一度同じ本を書き直すことだ。それができればお前は本当に偉くなれる。原稿が燃えたくらいで絶望するような人間の書いたフランス革命史は、出版しても世の中の役に立たない。だからもう一度書き直せ」と発破をかけ、自分を奮い立たせてもう一度同じものを書き始めました。そうして世界史に燦然と輝く本ができたのです。ちなみにこの友人とは『自由論』を書いたジョン・スチュアート・ミルで、又貸しの相手はその恋人だったそうです。

私はこの話を内村鑑三の本で知って、これこそ修養だと感じました。

インド哲学、仏教学の第一人者であった中村元先生に似たエピソードがあります。

中村先生が二十年かけて一人で執筆していた『仏教語大



辞典』の原稿約二万枚分を出版社がすべて紛失してしまつたのです。中村先生は謝りに来た出版社の人に対して一言も文句を言わず、「怒っても出てきませんから」と言われ、再び最初から書き直して八年がかりで完成させ、「やり直したお陰で、ずっと良いものができました。逆縁が転じて順縁となりました」と言われたそうです。

カーライルも中村先生もまさに修養の人です。大堪忍の人です。このような人物に一步でも近づくために私達は修養をしなければいけません。

最後に新渡戸博士の『修養』から引用させていただきます。

「日々の平凡な務めを満足に行い、続けさえすれば、一生に一度あるかなしかの大難題が起こることも、これを解決するは容易である。ただ日々の平凡の務めを怠る者は、かか



る大難題に出会^{であ}うと、はなはだしく狼狽^{ろうばい}し、策^{さく}の出^いずる所^{ところ}を失^{うしな}う。ゆえに難題^{なんだい}の解決^{かいけつ}も、要^{よう}するに日々^{ひび}の平凡^{へいばん}の務^{つと}めをなし遂^とげることによつて初^{はじ}めてできることと思^{おも}う」

「日々^{ひび}刻々^{こつこく}の修養^{しゅうよう}は、これをなしておる間^{あいだ}はさほどにも思^{おも}わぬが、それがだんだん集^{あつ}まり積^つもると、立派^{りっぱ}な人物^{じんぶつ}を築^{きず}き上げる。始^{はじ}めは苦^{くる}しがりながら修養^{しゅうよう}に勤^{つと}めても、慣^なれてくると修養^{しゅうよう}が身^みの肉^{にく}となり骨^{ほね}となり、凡人^{ぼんじん}と異^{こと}なるところの人^{ひと}となる」

日々^{ひび}の修養^{しゅうよう}、それは唱題^{しょうだい}、三徳^{さんとく}の实行^{じつこう}以外^{いがい}の何^{なに}ものでもありません。

よろしくお願^{ねが}いいたします。

